

## 「危機の時代にあった 過去と未来をつなぐために」 〈新型コロナウイルス禍を経て〉

人間科学研究所所長

森 茂起

人間科学研究所では、二〇二〇年度より、新しい研究事業「過去と未来をつなぐ危機の乗り越えに向けて」を開始しています。二〇一九年度まで四年間続けてきた事業、「現代人の心の危機に関する共同研究」Phase 5:「過去と向き合い、未来を創る」を受け継ぎながら、研究活動を次の段階に進めるための事業です。昨年申し上げました三年間を四年間に延長して、二〇二三年度まで実施の予定です。

本年度も、新型コロナウイルスの感染拡大によって事業に変更を余儀なくされましたが、秋に入ってからようやく感染が収束に向かい、対面で事業を実施する可能性が見えて参りました。学園祭も感染対策を行いながら開催され、大学の日常が戻りつつあることを実感しております。今後の推移を見守りながら、事業を展開していきたいと考えています。

人間科学研究所の起源は、阪神・淡路大震災後に設立された

文学部人間科学科の心理学教員を中心に企画し文部科学省学術フロンティア推進事業に応募し、採択された研究事業にあります。震災後に展開された「心のケア」実践を背景に、「心の危機」をキーワードとして生まれた学際的研究プロジェクトでした。研究主題としては、研究所開設前から現在に至るまで、「心の危機」を一貫した主題として掲げながら、二〇二〇年度からの研究計画においては、(一)「社会による子育て」(二)「シャルベダゴジ」の概念のもとに進める、「子ども・子育て」に関する研究・実践、(三)トラウマ(戦争、災害、虐待、暴力等)、人生史、記憶を対象にした、思想、心理学、アート、歴史、社会学などによる学際的研究、(四)人間科学の哲学的・思想的基盤を検討する研究、の三つの主題に整理して事業を進めています。

(一)では、少子高齢化社会における「子ども・子育て」を主題として、一八号館の立地、空間、機能を生かして、地域貢献も含めた実践と研究を展開してきました。当初、「子ども・子育て」関連事業は、人間科学科及びカウンセンシングセンターのスタッフを中心に行なってきましたが、兵庫県少子高齢局と連携しながら、経営、経済、行政、社会学の学内研究者のネットワークを構成し、学際的研究を進めています。その成果を生かして基礎共通科目「ライフプラン教育」が開講(二〇一九年度)され、「ライフプラン教育」を主題とした大学間連携(信

州大学、甲南女子大学)も開始しました。「子ども・子育て」問題を、親子だけではなく、学生、祖父母、地域の高齢者も含めた多世代連携によって扱うことを目指しています。本紀要に掲載していますように、人口心理学の観点からの特別講演会、学生相談室との共催による、大学の「子育て機能」の検討など、「社会による子育て」の視野を広げながら、連携の拡大、研究主題の発展に努めています。

(二)では、それぞれの研究員が研究を進めながら、今年度に開催された「日本における第二次世界大戦の長期的影響に関する学際シンポジウム」(全五回)に協力した他、阪神淡路大震災から四半世紀を経て、甲南大学生の震災体験の検証も計画しています。

(三)では、甲南大学図書館の九鬼周造文庫の整理に協力しつつ、九鬼周造研究会を継続して開催しています。今年度に整理が進んだ九鬼の書簡に関する研究は今後の課題です。

活動の全体を通し、「共同研究」「地域貢献」のみならず、「学生教育」も人間科学研究所のミッションと考え、学生が参加する実践活動(子どもが一八号館に集う活動に学生が参加するなど)を行い、その教育的効果の検証を研究の主題にしています。先の学生相談室との共同研究会のように、大学による学生教育を、「社会による子育て」の一部に位置付けて考えることを重要な課題としています。

少し内情を申し上げますと、いずれの大学や研究所でも同様の事情があると思われませんが、研究員の状況を見ますと、それが科研等の競争的資金を獲得しながら、大学教育及び大学行政に関する仕事と合わせ、すでにいわゆる「エフォート」の限界まで仕事をしていると思われまます。そのなかで大学組織としての研究所で研究活動を継続するには、各研究員が現在行っている研究主題を有機的に結びつけつつ活性化し、より大きな主題に取り組むことを可能にする学内連携、学外連携の核となることが重要な使命と考えます。関連主題に関する研究実績のある教員の連携によって可能となった、「子ども・子育て」「次世代育成」プロジェクトはその一つの形です。

今年度すでに開始された甲南女子大学との連携事業のように、大学間連携の窓口、結節点となることもより一層図っていきたくと考えています。「人間科学」という人文科学・社会科学・自然科学にまたがる学際性を持つ名称と、「常に備へよ」の平生精神を背景に、阪神・淡路大震災から現在の諸課題に至るまでを総合する「心の危機」という主題によって研究を束ねていきたいと考えています。

本号には、コロナ禍の中で開催された講演会、研究会の記録を掲載することができました。それぞれの中で扱った議論を、今後の連携に生かしていきたいと思っております。本紀要は、今後も、研究員の研究発表の場として、研究所が開催したシン

ボジム等の成果公表の場として、役割を果たしていきます。今後とも研究所の活動へのご支援、ご参加をいただければ幸いです。

(もり しげゆき)